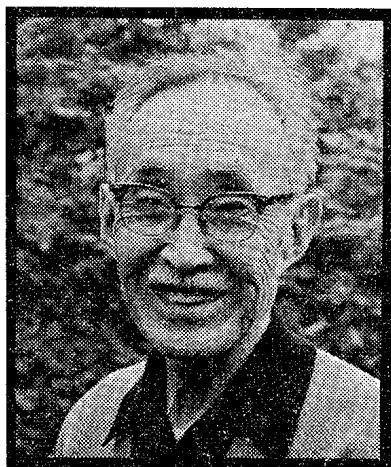


中村白葉先生を悼む

木村彰一



本日、思いがけなくも、このような形で、敬愛する中村白葉先生とおわかれしなければならなくなりましたことは、わたくしども日本ロシヤ文学会会員一同の深く悲しみとするところであります。せめてもうしばらく生きていていただきたかった、学会の最長老として、せめてもうしばらくわたくしども後輩の指導誘掖に当たっていただきたかった、という思いが痛切にいたします。昨年、芸術院賞ご受賞のときの先生のいつにかわらぬあの温容がほうふつとして眼前に浮かびます。しかし、いまはすべてかえらぬ昔となってしまいました。

先生は明治23年のお生まれで、明治45年、当時の東京外国語学校ご卒業後、今日に至るまで一意専心、ロシア文学の紹介と翻訳、とくに翻訳にとりくんでこられました。すでに大正年間に、ドストエフスキイの『罪と罰』をはじめとして、トルストイの『アンナ・カレーニナ』、ソログープの『小悪魔』、レールモントフの『現代の英雄』、アルツィバーシュの『サーニン』などの翻訳を続々発表され、また昭和にはいってからは故米川正夫先生とのご共訳で「トルストイ全集」を刊行、ついで「チェーホフ全集」18巻を単独訳で世に問われました。また比較的さいきんの昭和33年からは2回目の「トルストイ全集」の刊行を思い立たれ、数年後みごとに完成されました。このように多年にわたるロシア文学翻訳のご業績に対し、昭和42年にはソビエト連邦から「名誉勲章」を受賞され、また昭和48年にはあまねく世の知るごとく芸術院賞を受賞しておら

れます。他方、昭和43年には、いずれも故人となられた八杉貞利、米川正夫、原久一郎諸先生のあとをつがれて第四代の日本ロシヤ文学会会長となられ、今日に至るまでその職務に尽瘁してこられました。

中村先生が50年以上にわたって心血を注いでこられた翻訳のお仕事はとくにその初期にあっては、参考すべき辞書の数も乏しく、また先人による翻訳も皆無に近かったにもかかわらず、おどろくべき膨大な量にのぼり、質的にもきわめてすぐれたものがありました。まさに偉業の名を冠するに足るものがあります。しかも昭和初期以後は訳すべき作品をおおむねプーシキン、トルストイ、チェーホフという、いわば19世紀ロシア文学の本流を代表する作家の作品にかぎられ、翻訳のご態度も、「原作者の心の中にまではいりこまねばならぬ」というご信念から、テキストの一字一句もおろそかにせぬ逐語訳を標榜され、最後までこの方針をおくずしになりました。先生のすべてのお訳をとおして他に見ることのできぬ独特の味わいと気品が感じられるのはこのためであり、ここに先生の翻訳家としてのユニークな一見識をうかがうことができます。

人間としての先生は温厚という形容がいかにもぴったりする長者の風格を具えていらっしゃいました。これはご生前の先生に親炙する光栄にあづかった者のひとしく胸に感じているところであります。わたくしども後輩に対するご態度にも、諱々と教えさとす慈父のおもかげがおありでした。お年を召してもさいごまで若さを失われず、しかもこうとお思いのときにはあくまで一本筋を通してされる、いかにも文学者らしい潔癖さの持主でもいらっしゃいました。功なり名とげたいわゆる有名人にありがちな気負いやてらいといったものはいささかも感じられない、まことにおくゆかしい謙虚なお人がらがありました。

深い悲しみに胸をとざされつつも、先生の長いご一生を振り返ってみると心に浮かびますのは、先生はまれにみるお仕合せなかたであったということであります。もっとも大正から昭和のはじめにかけての壮年時代には、種々生活上のご苦労もおありになりましたでしょう。またひろく外国文学の紹介という仕事がわが国の文化の特殊性から言ってまさに一日も廃すことのできない重要性を持つにもかかわらず、翻訳の価値はともすれば過小評価される傾向が

あり、先生もご著書の中でそのことに関する多少のご不満をおもらしになつていらっしゃいます。けれどもひるがえって考えますのに、先生のお訳が現在なおわが国の津々浦々で読まれていることはまぎれもない事実であります。先生のお訳をとおして、トルストイの心、チェーホフの心をわが心のかてとしている人びとの数はかぞえきれないほどであります。このことが、先生が生涯その掛け橋となることを念願された日ソ両国によって公にも認められたことは、先年の両度のご受賞の証明するところであります。また先生はご自分のお好きな道を一生貫かれ、人の親として、人の夫としてまことにごりっぱであり、老年に至っても仕事を廃されず、しかもつねに春風駘蕩、余裕綽々というおもむきがおありでした。「美しい老年」ということばが先生ほどよくあてはまる人をわたくしはほかに知りません。八十三という、あのゲーテやトルストイをもしのぐ長寿を重ねられ、ご最期もいかにも先生にふさわしい大往生であったと伺っております。ご遺族のかたがたもみなそれぞれの道においてごりっぱに繁栄しておられます。先生もって瞑すべし。わたくしがあえてこう申し上げても、先生は莞爾としてのことばをお受けくださるものと信じます。

中村先生、どうかお心おきなくやすらかにお眠りください。

(本稿は、昭和49年8月21日、故中村白葉会長の
葬儀にさいし、弔辞として朗読したものである)